

---

# ユグドラシルの樹の下で

paiちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コグドラシルの樹の下で

### 【Zコード】

Z7642Y

### 【作者名】

p-a-iちゃん

### 【あらすじ】

俺の姉貴は1歳違いで隣に住んでいる。本当の兄弟じゃないけど、生まれたときから世話になつてゐるらしい。そんな姉貴には密かな願いがあつたようだ。異世界で暮したいって、そんな願いに俺は巻き込まれてしまった。さらには、異世界には危険が一杯つて・・なんでそんなの持つて来るんだよ。っていうか、何処で手に入れた！・まあ、異世界なら仕方ないかなつて俺も流されてるし・・とりあえず姉貴と2人でなんとかこの世界で暮していかないと・・こんな決心で異世界暮らしを始める男の子の物語です。

## 俺の姉貴

小さな焚き火の前に座つた俺に、姉貴は「はい！」ってカップを差出した。

夜の森は静かで、何の物音も聞こえない。

時折、薪のはぜる音がパチパチと小さく聞こえる。

隣で、カップの「ーヒー」をフーフー息を吹きかけながら飲んでいる姉貴を見ると、俺の視線を感じたのか、此方を見て微笑んでいる。全く余裕があると言うか、無頓着と言おうか・・・

そもそも、こんな所で焚き火をしている原因となつたのも姉貴のせいだと思つてしまふ。

昨日の夕方、家に来たかと思つたら、「明日は、キノコ狩りだよ！」と黙つて帰つていった。

それからが大変だつた。

とりあえずザックを取り出し中身をぶちまけて再度詰め直す。

エマジエンシーキット、緊急薬品、非常食、携帯調理用の鍋と食器、ショラカップに固形燃料・・・

さらに、マルチプライヤー、ナイフ、軍用水筒、そして着替え1式と予備の圧縮下着1式だ。

これだけ詰め込むとパンパンにザックが膨らむが、まだ、ポケットがある。そこに、お菓子を入れると準備完了だ。

玄関にGエブーツを出しておき、部屋に戻ると、枕元に着ていく物を準備する。

ジーンズにGシャツ、トレーナーそれに厚手のソックスを畳んで置く。

最後に押入れの奥から、山菜採取用の鎌を取出す。

櫻の杖だ。上部はネジが切つてあり、其処に鎌をねじ込むが、何と鎌は鍛造品、鎌と言うより薦口を削つて刃を付けたような形状だ

が、山菜取り用と言つてい訳ではしちゃうがない。

次の日、朝6時に起きて朝食のパンをコーヒーで流し込み玄関先で待つことしばし、トコトコと姉貴が同じような服装で現れた。

同じような服装には理由がある。

俺の服は、下着に至るまで姉貴の趣味で、姉貴が購入したものだ。  
「はい。これでお願いね！」ってお金を渡す俺の母にも問題はあるのだが・・・

背負つたザックは俺よりも大型だ。

と言うことは、今回もとんでもない物を持って来たという事だ。  
とんでもない物とは、組立て式の大型コンポジットクロスボーダーである。

「野犬は嫌い！」って言つてたが、あれで撃つたら野犬程度では貫通するぞー全く・・・

2人で小さな町並みを抜け、裏山の山道を登つて行く。

キノコが近場にあるはずが無い。近場のキノコは老人の楽しみ。  
俺達は更に上の山中を目指す。

途中の展望台で休憩を取ると、更に山道を登つて行く。

道は次第に細くなり、終には獸道となる。それでも先に進む。軍用コンパスと地図があれば現状位置の確定は可能だ。この手の訓練は小学生時代からのオリエンテーリング大会で十分訓練を積んでいる。

「あつた！」

姉貴が籠を振り回してはしゃいでいる。

見ると、大きな山栗の木がある。下には沢山のイガグリが落ちていた。

早速、イガグリをブーツで器用に剥きながら山栗をゲットする。

数十個拾つたところで、再び獣道を進む。そして、日当たりの良

い斜面で本命のキノコを取ることにした。

キノコは日当たりが良い場所には生えない。そんな場所の何時も木の陰になつているような場所に生えてくるのだ。

10個程取つたところで、姉貴の籠を覗く。沢山あるのだが・・・。毒キノコが殆どだ。丁寧に鑑別して毒キノコを除いたところに俺が取つてきたキノコを入れる。

時計を見ると、昼を過ぎている。

姉貴が作った大きなオニギリを木陰で並んで食べる。

そして、さあ帰ろうかという時に、異変に気がついた。

太陽が雲に隠れ、山の方から霧がかかって来た。

急いで荷物を担いで山を下りる。しかし、道は獣道・・・何時しか異なる方角に進んでいることに気がついた。

昨夜の天気予報では今日は晴れのはずだ。朝からの日差しが原因であれば、さほど時をかけずに霧は晴れるはず。風が出れば更に早まる。

歩き続けて少し開けた場所を見つけたので、此処で休むことにする。

帰りが遅くなつても、姉貴と一緒にならば両親は心配しない。姉貴の家でもそうだ。ここは、動かずに霧が晴れるのを待つのが得策と考える。

霧は、時を経ても晴れる様子が無い。かえつて濃密さが増していく。

小さな焚き火を作ると、姉貴が簡単な夕食を作りはじめた。

姉貴は実の姉ではない。隣に住む矢上家の娘だ。俺と1歳程上になるが、俺が生まれた時から世話になったようだ。

俺の発した初めての言葉が「オネータン」だつたらしい。ある意味、姉貴のオモチャ同然ではあつたようだが、俺が歩き始めると常に付きまとつて面倒を見てくれたらしい。

矢上家は姉貴とお爺さんの2人暮らしで、お爺さんは合気道の道場を自宅で開いている。物心が付くか否かの頃から、姉貴と稽古をしていたようだ。

中学生になると直ぐに黒袴の資格を得て、今は年少組の指導までするようになった。

姉貴はさらに上を行つて、中学生の指導をしている。さすがに、高校生以上の組については師範が指導しているが、このまま稽古を続けると卒業と同時に師範の資格を得ることが出来そうだ。

道場では、亜流ではあるが杖術として、4尺の杖を使つた攻撃方法がある。これも、半ば強制的にお爺ちゃんに仕込まれた。

姉貴は高校生になると、合気道部ではなくバイトに勤しんだ。俺が高校に入ると半ば強引に付き合わされた。コンビニのバイトである。

バイトの給料は、全て変な装備に費やされた。日本の法規制を全く無視した調達網を姉貴は知つてゐるらしい・・道場に通つている変な外人にコネがあるみたいだ。

おかげで、海外の特殊部隊装備品が手に入つたが、こんな日本でどうするの?つていうような物ばかり・・・刃渡り40cmのグルカナイフなんて押入れに入れとくしかないが、今日は、ザックに収まっている。

こんな、怪しい2人だが、町の警察官には結構受けがいい。

それは、コンビニのバイトで強盗を2件撃退しているからだ。しかし2件とも警察以外に救急車が必要となつた。

最初の強盗は、姉貴が投げ飛ばした先にあるガラスドアを破つてガラスによる腹部裂傷・・もう少しで失血死だつたらしい。

2度目は、俺の床モップによる攻撃で、鎖骨損傷、肋骨骨折となつた次第である。

両方とも、正当防衛で処理されたが、やり過ぎないように厳重注意を受けた上で、感謝状を頂いた。

今朝も、この格好で巡回の警察官と会つたが、姉貴の「キノコ取りに行くの！」に「気を付けて行けよ。野犬に注意してな！」という事で、済んでいる。

しかし、この霧は異常だ。夜になりさらに濃密さが増している。小さな焚き火に照られた数mの空間のみが存在しているようにも感じる。

肩に重みを感じる。どうやら姉貴はエマージョンシートに包まつて眠り込んだらしい。いつの間にか、姉貴を小さく感じるようになったが、これでも姉貴は170cmはある。俺が、180cm迄背が伸びたからなのか・・・

ガサ・・ガサ・・と何かが近づく音がする。

殺氣は感じないが用心の為に、杖を直ぐ脇に寄せた。

茂みからガサリという音と共に現れたのは、小さな老人の姿をしていた。

しかし、老人が身に纏っているのは、着古した着物のようなものである。古木の杖をついて焚き火に近づくと、俺の対面の地べたに座る。

ジツとしている姿は苔生した石仏のようだ。

害がなさそうなのでほっておくことにした。触らぬ神に祟りは無

「 いつて言つし。

「 我を敬う者の子孫たる娘の願いを聞くことにした。・・お前の  
意思は知らねど、同行させる。お前達に与えるものは3つ、老いと  
病を防ぎ、言葉の理解、それに若干の体力向上・・娘の願い通り慎  
ましく生きよ・・」

一方的に話を終えると、立ち上がり霧の中に消えていく。  
白昼夢？にしては、現実的だ。現に、老人の座った場所は草が倒  
れている。

ということは、この霧は先ほどの老人の仕業とも考えられる。  
俺達を迷わせ、此処へ導き、引導を渡す・・・ってことか。  
ともあれ、明けない夜はない。明日にはこの霧も晴れるだろ？。

## 霧が晴れて

「どうやら朝になつたようだ。

霧の明るさが増してきただが、見通しの悪さは、昨日のとおり周囲数m程度の見通し距離だ。

昨夜の怪異は幻だつたのだろうか・・時間が経てば経つほどに、現実味が無くなつてきている。

「おはよう!」

姉貴の能天気な声が、静寂の中ではやけに大きく聞こえる。

「おはよう。姉さん・・未だ霧が晴れないからしばらくは動けないよ。」

「そうだね。」つて言いながら、ザックの中を「じんじゃ」と漁つている。

やがて、昨日のオニギリの残りを取出して、焚き火の隅に放り込んだ。俺のザックからはトレッキング用の鍋を取り出し水筒の水を入れて熾火にかける。

そんな姉貴を見ながら、昨夜の老人の話をしていると、突然姉貴は俺に振り返った。

「少しその話は当つてるかも・・矢上家の古い名前はヤマガミと言ふのよ。・・(この辺の山岳信仰を一体化した山神の神官だった)と、お爺ちゃんが言つてたのを覚えてるわ。」

姉貴はそう言いながら焚き火から、オニギリを取り出し、ホイルを剥くと鍋に放り込んで、お味噌をニューっとチューブから取出すと鍋に入れてかき回している。

少しづつ霧が薄らいできた。もう、周囲10m以上は確認できる。回りを見る内に、小さな苔生した祠を見つけた。何となく、昨夜の老人の姿にも見える。そういえば、老人の消えた方向は祠の方向と同じだ。

「はい！」って姉貴が、雑炊モドキをカップに入れて渡してくれる。

薄ら寒い状態で食べる熱い雑炊はとりあえず体を温めてくれる。

「アキト・・食べながらで良いから、聞いてくれる？」「俺は、先割れスプーンを口に入れながら頷いた。

「昨夜ね、変な夢を見たの・・変よね。私は寝ていなつかたもの。

いや、十分にお休みでした。と姉貴には言えないのが辛い。

「老人が・・ぼろぼろの着物みたいなものを着た小さな老人が出てきて、言ったのよ。・・望みを叶えてあげる。って、それじゃあつて事で、老いす、病にかからず、どんな言葉も理解できるようになつて、言つたんだけど・・どうやつて確かめたらいいと思う？」

ちょっと待て、今の話つてさつき俺が話したこととリンクしてるのはないか・・待てよ・・もっと重要なことがあったような・・そうだ、「同行させる」だ。これつてどこかに誰かと行くという時に使う言葉だぞ。

「・・あの・・姉さん・・ひょっとして（どこかに行きたい。）

つて考えたことあるの？」

「あらー・・良く知ってるわね。・・偶に思うのよ。（自分達の

力だけで暮らしてみたい。」ってね。」

何気に2人称であることが気になつたが、ここはスルーしよう。  
朝日のせいか霧が更に晴れていく、もう100m程度先まで見通せる状態にまで回復した。

焚き火を頼りに野宿した場所は、20m程の小さな広場だった。  
先ほどの祠を祭った址なのだろう。踏み固められているためか木々がこの場所には生えないようだ。

周辺の木々は緑に覆われ・・・？

ちょっと待て！・・今は秋だぞ！

・・確かに生い茂つている。季節的には初夏の様相だ。

俺達が来た獣道を探すが何処にも見当たらぬ。いくら獣道と言つても痕跡すら無くなるはずはない。

懸命に探すが、広場の周囲にはやはり痕跡は無かった。

霧は薄れてはいるが未だ遠くの山並みまでは見えてこない。現在位置を特定して、下山する方角を探すとするか。

ようやく、遠くの山並みが薄く霧を通して見えるようになった。  
しかし・・ここは何処だ？

全く見覚えの無い山並みが聳えている。一番高い山は富士山のようにも見える。

「如何したの。アキト？」

呆然と立ち尽くす俺を見上げて、姉貴が訝しげに声をかけた。

「俺達の裏山じゃない！」

俺の声に、姉貴も立ち上がると周辺の山並みを見る。

「・・何処だろね？」

実際に気の抜ける問い合わせはあるが、2人とも見覚えの無い場所だとすれば、此処は何処なのだろう。

「ギョウー・・・

おかしな声で鳴く鳥が俺達の上を飛んでいく。

雉のように見えなくもないが・・・雉はあんなに空高く飛び回る」とは無い。

「アキト・・ひょっとして、だけど・・此処は、私達と違う世界かも・・」

それは、俺も考えていた・・しかし、それを言つたら姉貴が不安になるかもと、言えない言葉ではあつたが・・姉貴もそう考えるなら、此処は、間違いなく異世界つてことになる。

ガサガサ・・と音がして向かい側の藪からちいさな動物が姿を現した。

しきりに小さな頭を動かすと俺達に気付いたのか、藪の中に飛び込んでいった。

「見た!」

姉貴は、驚いた顔で俺を見る。

さつきの動物は、よく見る野うさぎのようだつたが、長い耳の変わりに角が頭の両側から生えていたのだ。ウサギとは違う動物かもしけないが、角の長さと生てる位置がウサギの耳のよつに見えた・・

「見た!・・でも、見たこと無い・・」

あんなのがいたら、パンダ以上の珍種だ。しかも俺の町の裏山にいるなんて聞いたことも無い。

やはり、姉貴の言つように・・此処は異世界。・・そして、俺は

姉貴の望みのままに異世界に同行してしまった・・とこゝことになるのだろうか。

姉貴がザックの中からクロスボーグを取出して組立て始める。

肩当のついた台座の左右にカーボン纖維で作られた弓を取り付け、先端の滑車に弦を張つていく。

ショルダーバックのような矢筒を首から肩に通して持つと、最後にバックの中から、短刀を取出してベルトに差す。

「ほらほら・・アキトも準備をするー！」

姉貴の行動をあっけに取られて見ていたが、その声で我に返つた。ザックの中からグルカナイフを取り出し、ジーンズのベルトを緩めてナイフケースを腰の後ろになるようにベルトにしっかりと取付けた。

姉貴を見ると、山菜鎌の鎌を取外して、クナイを柄の先端に取付けている。

ホントに何処まで武器マニアなんだか・・

「最後はこれね！」

姉貴がザックの中から包みを2つ取出す。そして大きいほうの包みを俺に差出した。

大きめの赤いバンダナに包まれた物はずしりとした重量がある。バンダナを解いて、現れた物は・・

「美月姉さん・・これは、何処で手に入れたのでしょうか？」

現れた物は拳銃だつた。しかも、M29の改造品・・俗に熊でも一発で倒せるって言ひ、マグナム44リボルバーだ。

しかも、バレルは7インチ・・ガン・スミス特注品と見た。

「バイト、3ヶ月分よ。凄いでしょ。私のはこれね。」

そう言つて膝のバンダナを解くと、現れたのはM36の4インチモデル・・やはり特注品だ。

「美月姉さん・・日本では、これを持てないような気がするんだけど・・何処で手に入れたの?」

「アレックさんに頼んだら、簡単に買つてくれたわよ。」

あの外人・・只者ではないと思っていたが・・やはり外交官だつたのか。

(南の島で泳ごう!) つて誘われて行つた先がグアム・

安宿宿泊かと思ったら、海軍基地の兵舎に泊めてもらつた。

そして、昼はひたすら射撃訓練。夜になつてようやく泳ぐことができた。

おかげで、南の島に4日も滞在したのに日焼けせずに帰つて来れた。

それを、昨年から何度も繰り返していた・・

ちょっと、待て・・そうすると姉貴は此処に来る前から、この日が来ることを知つていた事になる。

装備が増えた事で全体のバランスを取るために、サスペンダーがついた装備ベルトを取出して武器の取付け位置を変更する。

装備ベルトにM29のホルスターを取付ける。グルカナイフは柄が肩位置に来るようサスペンダーの肩当後方に固定した。最後に、44マグナム実包が6個づつ入つた2つのポーチをホルスターの両側に付ければ、今度こそ準備終了だ。

「姉さん・・ひょつとしてだけど・・此処に来ることが解つてたの？」

姉貴は、ベルトにレスキュー用の大型ポーチを取付けていたが、俺の問いにこちらを見た。

「・・・解つてたわ。・・あの老人は今まで、何度も現れた・・どうやら、この世界を去るみたいで、縁者の私の願いをずっと聞いてくれた・・私達だけで家のしがらみも無く暮らしたい・・そしたら、叶えてやろうって・・」

「・・姉さんだけじゃ不安だし・・しかたないか。」

他人だけど・・生まれたときから一緒に居る姉貴と別れるのは願い下げだ。

姉貴に交際を申し込んだ相手には何時も言つてている。

「俺を越えたら認めてやる！」

おかげで、姉貴が高校へ入学して以来、毎月のよつにヤサ男をボコボコにしている。

今の俺がこうしているのも姉貴のおかげだし・・ある意味、姉を超えた感情も少しはあるような気がしないでもない・・

「アキトならそう言つと思つてたわ。・・じゃあ、出かけましょうー！」

姉貴は、もう残り火だけになつた焚き火を足で踏み潰すと、ザックを肩に藪の中へ進んで行く。

俺も、急いでザックを取上げ姉貴の後について行つた。

## 知らない世界

道の無い山中を歩くのは容易ではない。

見知らぬ山なら尚更だ。

山裾と思われる方向に藪を払いながら進んで行く。

俺の前に道は無い。俺の後ろには道はある。という状態だ。

途中の沢で、小休止を取る。冷たい水で顔を洗うと頭までスッキリする。

残り少なくなつた水筒に水を補給して、再び下山を始めた。

急斜面の山肌を何度も下りる内に、傾斜を殆ど感じない場所まで来た。

深い森の中を歩いている感じだ。

時折、ギヤーっという変な声で鳴く鳥達が頭上を飛び交い、何度も猪のような獣（大きな牙が左右に2本づつはえていた）を遠くに見かけた。

「だいぶ、歩きやすくなつたね。」

「うん。・・でも、この森・・何処まで続くんだろ？」

「歩いてれば、その内出られるわよ。コンパス見ながら同じ方向に進んでるんだから。」

山や森で遭難する原因の一つに方向を見失うことが上げられる。岩や立木を迂回する内に、方向が判らなくなるのだ。俺達は常に一方向、南に向かつて進んでいる。

時計の時刻で昼を知り、岩の上で携帯食料を食べる。

固形燃料でお湯を沸かし、コーヒーを作つて姉貴と分けて飲む。

「・・・ご免ね。」

「誤る事なんかないよ。良く俺を選んでくれたって感謝したいくらいだし・・姉さんは・・離れたくないし・・」

いきなり、俺は姉貴に抱きつかれた・・しかし、此処は岩の上、此処でそんな風に抱きつかれると・・物理の法則は正しいもので・・ドシン!と下の藪に2人とも落っこちてしまった。

「・・・」免ね!」

赤い顔で、とつさに体を入れ替えて下敷きになつた俺から体を離していく。

とりあえず俺は立上がり、店開きした装備をザックに押込み、森の中をまた歩き出す。

今度は姉貴が先頭だ。

姉貴の長い丈のGシャツの背にはザックとクロスボーラーが乗つている。

あのザックには、分解したクロスボーラーと2丁のハンドガンそれに弾薬ボーチが入っていたはずだが、それを取り除いた状態であるのにザックはまだ膨らんでいる・・謎だ。

森の巨木を避けるように姉貴が先導する。

たまに、手元を見るのは、コンパスで方向の確認をするためだろう。

1時間程度歩いていると、前方が少しづつ開けてきた。

立木も細くなり、間隔も次第にまばらになつたが、逆に藪が深まつたような気がする。

そして、突然に前方が開けた。  
草原に出たのだ。

低い段丘がずっと南に続いている。

東と西の景色も森と草原であり、振りかえれば2000m級の山並みが連なり、その奥には、富士山のようにも見える一際高い山が鎮座している。

人家は確認できない。広い視野の中に煙らしきものも存在せず、煙も見えない・

「・・姉さん・・何も無いみたいだけど・・」

「・・そうでもないみたいよ・・立木に薪取りした痕跡があるわ。」

姉貴は、いつの間にか取出した小型双眼鏡で広い草原を監視していた。

手渡してくれた双眼鏡で確認すると、確かに鋭利な刃物で枝を切取った跡が見える。

200m程東のその場所に俺達は向かうことにした。

草原の草は見た事が無い草だったが、草丈が20cm程であり、歩くのには余り支障にはならず、数分で問題の立木までたどり着いた。

確かに、誰かが意図的に枝を切取っている。

周囲を見ると、森の中に踏み固められた小道が続いており、所々の立木に薪取りの跡が見える。

「誰かいるみたいね・・」

姉貴の咳きに俺は首を縦に振る。

異世界の住人・・俺達と同じような姿なのだろうか・・それとも、目が3つとか、手の代わりに触手が付いてるとか・・

「たぶん、私達と同じような姿だと思つよ、ほらー。」

姉貴の指差した地面には靴の跡があった。

靴跡は、足の大きさが15cm程度であり、30cm程度の間隔で交互に続いている。2足歩行をする者で、靴を文化として持つていることが判る。

でも、この大きさだと子供ぐらいじゃないか・・ガリバー旅行記が頭の中に過ぎる・・

子供位の背丈が標準なら俺達は十分に巨人だ。

さらに草原を注意深く見ると、東に向かつて草が踏まれている場所があった。

森は小道を形成していたが、草原では草の勢いが強く、小道までには至らないみたいだ。

姉貴は先に行きたかったようだが、草原に獸がないとも限らない。

薪の心配が無い森の傍らで今夜も野宿することにした。

2人並んで焚火を見つめる。

携帯食料をコーヒーで流し込むと、後は明日まで交代しながら焚火の番になる。

「姉さん・・ちょっと、気になることがあるんだけど・・聞いていい?」

「なあーにかな!」

「姉さんのザック・・いろんな物を出してもまだ膨らんではるのは

何故かな・・つて？」

「それはね・・このザックが魔法のザックだからなの！・・10倍入つても、重さは15分の1・・いいでしょ。」

「それと、先に言っておくけどアキトの銃とポーチも魔法がかかってるわ。だから壊れることはないわ。弾も1日で6発補充されるとし・・」

「あまり撃てないつてことだね。・・解った。」

だつたら、おれのザックもそつしてくれ！と言いたいとこだけど我慢するの男の子だつて言い聞かされてる。

銃が壊れずに使えることは嬉しい限りだ。1日で撃てる数は最大で18発。しかしその日は6発になる。M29の威力を考えると大型の獣が対象となる。とりあえず逃げることにすれば、それほど使用する機会は無いだろ？

「はい！」

姉貴が薄い銀色のケースを俺に渡してくれた。  
横に小さな突起がある。

突起を押すと、ケースが開き・・中に5本のタバコが入っていた。  
「内緒にしてるみたいだけど・・知ってるのよ。・・沢山は入つてないけど、1日にその本数なら許してあげるから。」

ちよつと氣まずい思いではあつたが、「ありがと！」と返事をして、早速1本を取出して、焚火から枝を取つて火を付ける。  
ぶかーーっと煙を吐出すのを面白そうに見ていた姉貴は、ザックから小さな袋を取出すとキャンディを一つ口に入れた。

「気分転換を図つてくれるものは必要だよねー。」

知らない世界に姉貴と2人で、誰にも会わず2日を過ごしていたことで、確かに少しナーバスになっていたかも知れない。少し前向きになる必要がありそうだ。

明日は、草原の道らしきものを辿り、人家を見つけよう。薪取りをする以上、火を使う者であるはずだし、切口を見た限りでは金属を加工する技術を持つていることが判る。

原始人ではなく、少しあは文明を持った者に合えるかも知れない。そして、俺達を受入れてくれるなら、何の問題もない。

何時の間にか姉貴が寝入つている。

肩に掛かる重みも近頃は気にならない。満天の星空に小さな2つの月が見えている。

どちらも半月だが、寄添うように空に浮かぶ月は俺達2人のようだ。

後、月が30度程移動したら姉貴と交代してもらおう・・・と思い、この世界で2本目になるタバコに火を付けた。

## // ニーハとの出会い //

次の朝、草原に残された草の僅かな踏跡を手がかりに東に向かった。

草原の短い草丈のおかげで見通しは良いが、相変わらず人家等は見つからなかつた。

突然、先を進んでいた姉貴が立止まると腰を落とし、俺に片手で腰を落とすように合図した。

四つん這いのような姿勢で姉貴に近づくと、双眼鏡を渡され、指先で確認方向を示される。

レンズが捉えたものは・・犬のような獣の数頭の群れであった。しかも、鋭く長い牙を持っている。

種類はかなり違つけれど、サーベルタイガーの犬バージョンって感じだ。

「此方が、風下みたいだね。まだ、気付いていない・・」

「大きさは、近所の太郎ぐらいだと思うんだけど・・獰猛みたいよ。」

太郎は近所の老犬だ。確かシェパードの雑種とか聞いたことがある。

今となつては怖くないが、小学生の時は怖くて前を通れずに、姉貴の後に隠れて通っていた。

ここは、触らぬ神に祟り無しの言葉通りに・・ゆっくりと姿勢を低くして進むことにした。

しばらく、四つん這いで進んでいると、草がきれた場所に出る。

道のようだ。

少しづつ立上がり辺りを見渡す。

誰もいないし・・さっきの犬モドキも姿を消している。

道の北方向は森に続いており、南方向は草原に続いている。

俺達が辿ってきた踏跡も、どうやらこの道から分かれていたようだ。

「二つちだね。」

姉貴は再び草原に向かつて歩き出した。

慌てて姉貴の後を追う。

草原を歩くより歩きよい・・確かにこれは道だ。森を離れないように緩やかなカーブを描いて東に続いており、尾根を一つ迂回するようにも感じられる。

「キヤ———！」

突然、かん高い悲鳴が聞こえてきた。  
姉貴がその声に反応して駆け出した。  
俺も慌てて後に続いて走り出す。

声からすると、小さな女の子のようだが・・

やがて、森の木立を背にした男が犬モドキの群れに襲われているのが見えた。

姉貴がM36を引き抜き空に向かつて撃つ。  
パン・・パン・・と銃声が響くと、犬モドキの群れがこちらに向かってきた。

「来るわよ・・準備して！」

姉貴の声に、杖を構える。

「グアアーッと叫び声を上げて襲つてきた1匹を杖で横なぎに打ちつける。」

「バギッと、てごたえを感じたからには肋骨をへし折つていると思つう。」

次の1匹は脳天に杖を振り下ろして頭蓋骨を叩き割つた。

3匹目は遠巻きに唸るだけで襲つてはこない。

姉貴も手製の槍で2匹を殺つたようだ。槍先からまだ血が滴つてゐる。

しばらく睨み合いが続いたが、ガオン…と1匹が吼えると、群れは草原に走つていった。

俺達は恐る恐る、木の根元に倒れている男のところに進んで行く。首に手を当て脈を確認する。脈はなく胸の上下もない・・・体のあちこちに出血が見られる・・失血死か・・・  
おれの仕草を見ている姉貴に首を振る。

始めて見るこの世界の住人だ。

姿形は俺達と変わりない。手の指も5本づつ付いている。  
服装は・・綿ではなく、麻のような手触りの上下を着ており、皮製の簡単な上着を着ている。靴は・・これも手作りらしい皮のブーツを履いていた。

「私達と同じだね・・少し安心だわ。」

「でも、文化程度は低そうだよ。・・服飾はこんなだし・・」

持物を探すと鉈のような短い剣と背負籠それに男が振るつていた木の棒が転がっていた。

籠の中には、数種類の草と薪の束が入つてゐる。

どうやら、薬草か何かを採取に来て犬モドキに襲われたらしい。男の遺体をどうしたものか考えていると、傍の立木から小枝が降ってきた。

ん？ つて立木を見上げた時、

「キヤー！」

叫びと同時に茂みに何かが降ってきた。

姉貴が槍を構えて恐る恐る茂みに近づいていく。

「アキトー・・見て、見て・・かわい・よー・ー・」

姉貴が茂みから田を離さずに片手でおいでおいでをしてい。なに？ ってな感じで、茂みに近づき覗き込むと・・

女の子だった。10歳前後の女の子だが・・  
頭の髪の毛からピヨコンって耳が・・ネコ？  
ワンピースみたいな簡単な皮服のお尻からは50cm程度の尻尾  
が生えている。

小学生ぐらいの背丈だけど、肌は俺達と同じだが髪の毛が青みを  
帯びた白だし、耳と尻尾は白色の短毛で覆われている。

木から落ちたショックで田を回してみたけど・・  
姉貴がギューって抱きしめてるから・・呼吸困難になってるみた  
いだ。

顔色がだんだんと青ざめてる。

「姉さん・・離さないと死んじゃうかも・・」

俺の声に、ハツ！ と気が着いたみたいで、膝に寝かせたが・・尻  
尾をナデナデしている。

俺は、女の子の体を触りながら負傷の程度を確認する。特に、骨折等はしておらず、木から落ちたときの衝撃で一時的に気を失つたらしい。

女の子が姉貴の膝で動き始めた。

「ムウウウン・・ハツ・・・痛ツ・・・

目をパチッって開くと、素早く身を起こしそうとしたが、どうやら痛みのせいでのまま横になる。

「・・もう一人は亡くなつたけど・・ 襲つてた獸はいなくなつ

たわ・・もう大丈夫!」

「・・ところで、貴方は誰?」

姉貴が女の子の背中を撫でながら言つと、

「・・ミーア・・そつニーヤの・・ご主人様は・・死んだの・・」

淡々とした答えだつた。

どうやら、女の子は奴隸だつたようだ。

主人に命じられて野山の薬草を採取していたが、今日に限つて高額で取引される薬草が森で豊作だと聞き、一緒についてきたらしい。

主人を失つた奴隸がどうなるかは解らないとのことなので、彼女が住む村についていくことにした。

さつさとミーアは蔓で編んだ籠の中に、男の持物を入れると近くの犬モドキをジッと見つめている。

犬モドキを指差して俺に聞いてきた。

「・・ガトル要らニヤイの？」

「・・要らない。食べられるとも思えないし・・」

どうやら、犬モドキはガトルといつらしい・・  
すると、ミーアは籠から短剣を取出すと、短剣でガトルの犬歯を  
取出した。

右の犬歯を取出すと、次のガトルにかかる。  
俺もグルカナイフを握つて残り2匹の犬歯を取つてミーアに渡し  
た。

「ありがと・・これ、交換できるの。」

ミーアは無造作に籠にポイつて入れると、その籠を担ぐ。

「行こ・・」

姉貴がミーアの手を握つて一緒に歩き始める。俺もその後を追つ  
た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7642y/>

---

ユグドラシルの樹の下で

2011年11月24日21時50分発行